

# 日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol.17 2017 年 4 月 1 日

## 目次

1. 巻頭語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平原 憲道
2. 第9回学術大会のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・ 吉田 悟
3. 仏教心理まんだら・・・・・・・・・・・・・・・・ 神 仁
4. 編集者よりお願い・編集後記・・・・・・・・ 千石 真理  
松村 一生

## 巻頭語

平原 憲道

(慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学教室 助教 武蔵野大学 文教文化研究所 研究員)

「あべこべ」のススメ

3月、多摩川にほど近い二子新地で大山街道沿いに家を建てた。自分たちの持ち家ではない。界限にまとまった土地や物件を持つ大家が施主となり建てた3階建ての家だが、設計図を引く段階から参加した。つまり、賃貸物件では普通、物件あつての入居者募集なのだが、これは「建てる前から入居者が決まる賃貸」である。順序が「あべこべ」なのだが、ちゃんと理由がある。

2年前、10年近く住んだ賃貸マンションから引越そうと思い立った。新築マンション、戸建て、中古戸建てなど時間をかけて物色したがどうもびんと来ない。不確実な時代にローンを組むのは非合理だし、職業も住処も「転石苔むさず」をモットーにする妻と私は引越しを好む。だが賃貸マンションはもう飽きた。新築戸建ての賃貸で、かつ賃料が支払い可能域に収まる都合の良い物件はないか。すると強運だけが取り柄の私のもとに不思議な縁が来た。ある不動産会社と大家が計画の中の新築に「変な家族」を募集中と言う。賃貸なのに借り手が物色される訳で、またもや「あべこべ」である。

「面接」で話を聞くと、「文化発信する家族」を物色中とのこと。具体的には、江戸～明治期に多様な文化が往来した結節点であるここ大山街道において、古えの文化を敬いつつ未来を睨む教養と文化を発信することで「箱モノではない町おこし」を目指したいらしい。それをリードするような家族に住んで欲しいらしい。

「認知科学と医学と仏教やってますけど。」「ほほう!?!」「昔から『寺子屋』やりたくて。文化発信基地に使えませんか?」「ほほほう!!」その後2時間に渡り語られた「寺子屋構想」を先方がいたく気に入り、その日のうちに入居者が決定した。後で知ったが、向かいにある真宗大谷派の光明寺は江戸末期～明治初期に著名な「寺子屋」であったという。だが今から、寺でもない我々

が寺子屋をするという。これまた「あべこべ」である。

10年は引っ越さない、二子界隈の文化教養レベル向上のため寺子屋活動を定期開催する等の条件と引き換えに、家賃や家の設計を含めた入居条件を交渉し新居建設が開始された。ところが、建築士が「ユニークな家族に相応しく」と設計した3階建て木造住宅はユニーク過ぎて工事が遅々として進まない。長男の転校を考え3月引越の計画だったのだが間に合わない。大家の提案で新居予定地の隣にある大家所有のマンションに運よく空室があり取り敢えずそちらを「仮居宅」とした。家が出来る前に引越をした訳で、これまた順序が「あべこべ」だ。お蔭で家が建つ過程をつぶさに観察でき、長男の夏休み自由研究は自然と「家が建つまで」と題するレポートになった。

昨年の12月に新居が完成した。「住居」なのにプライバシーへの配慮はゼロかと言わんばかりのオープンな造りで窓ガラスが実に23枚もある。しかも玄関までもが特注の大型ガラスで丈夫な扉など存在しない。収納スペースも少なくデザイナー曰く「見せる収納」らしく、「あべこべ」はどんどん顕著になる。もともと、「地域に開かれた住まい」というコンセプトを提案したのは当方であり、「住居兼寺子屋」には相応しい。玄関には靴を脱がずに入れる土間があり、リビングと繋がる空間の天井は3メートルもあり完全にパブリックなホールだ。ちなみに1階にはイタリア料理店が入っている。我が家は2階と3階に住む。

さて、4月からの「寺子屋」では何をするのか。子供向けには彼らの夢を後押しできるような企画を考えているが、むしろ並行して計画する「大人の寺子屋」にこそ期待されたい。寺子屋と言えど子供のものとは決めつける層には「あべこべ」に映るだろうが、子供に教養を求めるならまずは大人が文化教養を身に着ける必要がある。例えば私と同世代の大人は子供の「教育（受験）」に熱心だが、その果てにぼんやり狙う「勝ち組職業」の多くは、子供が社会人となる15年後にAIに置換されることを知った上での行動か。我が子が身に着けるべきスキルは、Googleの検索結果をなぞるような薄っぺらい情報保持能力ではなく、むしろ「多様な友達をつくる能力」のような、AIに置換できぬ力に成りつつある。関連分野に生きる研究者として私は素材を提供し、活発な議論を寺子屋にて行いたい。

2月下旬に「まちびらき」と称したイベントを不動産屋と大家の主催で行い、新居とマンション間のスペースを利用した地元の花屋や農園の出店と共に、新居へのツアーと寺子屋構想の紹介を行った。250名を超える来場者の数は、周囲の期待を反映したバロメーターでもあろう。若い保護者たちとは3時間も立ち話をする羽目になった。

「普通」や「常識」と逆行するものを「あべこべ」と呼ぶが、ひっくり返すことで異なる景色が見えてくる。それは言葉とは裏腹にむしろ「顛倒」をひっくり返す効用を持ち、故にこそイノベーションが潜む。あべこべ尽くしの我が家の新居は、建築前も建築中も、そして建築後も未知の興奮に満ちている。AI時代だからこそ仏教の、そして心理学の浮かぶ瀬があるのではないのか？

「あべこべ」のススメである。この春、皆さんもぜひ。

## 第9回 学術大会のご案内

吉田悟（文教大学人間科学部教授、第9回学術大会長）

12月10日（日）、文教大学越谷キャンパス12号館（埼玉県越谷市）にて、第9回学術大会を開催いたします。万障繰り合わせの上、ご参加下さい。

基調講演では、同僚で友人の高尾浩幸教授（精神科医、分析心理学）に、古事記神話を題材にして、仏教伝来以前に遡る「日本的な私」の基底についてお話いただきます。高尾氏の代表作は、「日本的意識の起源：ユング心理学で読む古事記 新曜社 2001」です。高尾氏は、ユング研究所（チューリッヒ）に留学し、ユング派分析家資格と学位を取得されています。私自身はこの講演から、西欧的な私（自我）を脱構築する上でのよきヒントが得られるのではないかと楽しみにしています。

さらに、仏教者が考える「よき私」とはどのようなものか、3つの「よき私（西欧的、日本的、仏教的）」の関係はどうなっているか、などについてシンポジウムで議論できたら面白いのではないかと考えています。



大正大学、駒沢大学で仏教学を専攻しましたが、1987年に、インド政府招聘プログラムにより、インド国立ベナレス・ヒンドウー大学大学院に留学しました。

千石：インドに留学ですか！インドに長期間滞在するのは大変なことだと思いますが、そこが先生にとって、臨床仏教の原点になったのでしょうか。

神：ベナレス、カルカッタで過ごし、虐殺の対象になった仏教徒、チャクマ少数民族の支援に携わり、また、マザーテレサの設立した“死をまつ人”にボランティアで入るなどして、臨床仏教のあり方について思いを巡らせました。

1988年には、ヒンズー教徒とイスラム教徒の争いが熾烈化し、宗教の国であるはずが、人命がまるで虫のように扱われるのを何度も目撃し、ショックで立ち上がれないほどの無力感を経験しました。当時まだ26～27歳で、この状況を受け止めることは、到底無理だと思いました。インドに何かを求めて行きましたが、結果、宗教に一層失望し、日本に戻りました。

千石：日本の宗教にも失望されていた、ということでしたが、その後、仏教とはどのように関わりを持たれたのでしょうか。

神：日本の仏教のあり様には、相変わらず発露を見いだせずにはいたのですが、難病の子供の支援活動などするうちに、30代半ばで全青協（全国青少年教化協議）の青少年問題研究委員になります。2008年より、全青協が母体の臨床仏教研究所では、寺院や一般の方のニーズについて調査しました。その結果、一般の方は、葬儀や法事の他に、看取りや心の問題などを含めた、生老病死に対応できる宗教者を求めていることがわかりました。

そこで、社会的機能が失われ、形骸化した仏教を本来の姿に、原点に戻そうと、生老病死に寄り添える仏教者の育成である臨床仏教師養成プログラムを2013年よりスタートしました。

臨床仏教、といっても、僧侶は本来、仏教を社会的に実践するのが当たり前のことです。

聖徳太子が四箇院を建てたように、仏教が社会的・公益的機能を回復し、人びとの生老病死に寄り添い、抜苦与楽を実践する使命を、臨床仏教師に果たしてほしい。

ですから、私にとっては、臨床仏教師というのは方便の言葉であり、臨床仏教の実践が当たり前になる未来を信じて臨床仏教師の養成に従事しています。

千石：医療や貧困の苦しみの現場で、臨床仏教師が関わっていくのは、容易なことではないと思いますが。

神：臨床仏教師の言動等がケア対象者の心を傷つけるなど、二次被害を与えるようなことになってはなりません。臨床仏教師の認定には責任を感じ、細心の注意を払っていますが、結局は神仏や宇宙の無限のいのちに任せ、お導きいただいていると思います。

また、本来は、子供の頃から、縁起、相互依存性を理解できるような情操教育、仏教教育が大切だと思います。

千石：多方面での臨床仏教活動が必要ですね。今後とも、益々のご活躍を期待しています。

◎☆☆◎

全国青少年教化協議会 臨床仏教研究所ブログより

## 第二期 臨床仏教師 認定式・記念講演会開催！

生きていく上で、私たちはさまざまな困難に直面しなければなりません。そして社会に多くの問題が山積する昨今、人に寄り添い、そのこころを聴く人の存在がよりいっそう求められるようになってきました。

「臨床仏教師養成プログラム」は、不登校・ひきこもり、虐待をはじめとする子どもや青少年の問題、そして自死問題、被災者がかかえる問題、さらには誰もが避けられない「看取り」にまつわる苦悩など、現代のあらゆる生老病死の課題に寄り添う仏教者を養成するために開設しています。

今回、認定者を出した第二期のプログラムは、2014年の10月より始まりました。第1ステップの座学(30時間・83名受講)、第2ステップのワークショップ(40時間・34名受講)、そして最終ステップとなる、医療機関や社会福祉施設等の臨床現場での臨床実習(100時間以上・8名受講)の後の最終考査を経て、この度、晴れて5名の方が第二期臨床仏教師としての認定を受けました。

### ◆新たな臨床仏教師の誕生

3月30日に開催された認定式では、多くの方々の祝福を受けながら認定状の授与がなされました。また、認定者一人ひとりが関係各所への謝意を述べながら今後の活動への抱負を語りました。

「これからご縁をいただく目の前のその人に対して、和顔と愛語をもって、慈しみのこころをこめてお話をお伺いしたいです。(Uさん)」「講座で学ばせていただいた慈悲や平等の心をもって、これからの青少年教化の歩みを進めてまいりたいです。(Oさん)」「今日の日を新たなスタートに、また自らの足で生老病死の現場に向かい、悩み苦しむ方々に寄り添ってまいりたいです。(Hさん)」

「臨床仏教師という名前をいただくことの責任を感じ、身が引き締まる思いです。無力でありな



がらも仏性を信じ、誠実に、ひたむきに、苦を抱える方々とこれからも向き合っていきたいと思っています。(Mさん)「すこしでも患者様、苦を抱える方の気持ちに寄り添い、いただいたご縁に報いてまいりたいです。(Mさん)」

花園大学総長の河野太通さんは、祝辞として阪神大震災の際のエピソードをお話くださり、一人ひとりの尊い「いのち」を前に、仏教者として何ができるかという深い問いを投げかけられました。

◆仏さまに見守られながら

また、続いて行われた記念講演会では、「看取り医がブッダに学んだこと」と題して、東京大学名誉教授の大井玄さんが、仏教と医療・科学の接点を解き明かしながらお話してくださいました。

自らの行いによって、明日の世界が変わっていくかもしれない。笑顔を向けたら、相手もうれしい気持ちになるかもしれない、すこしほっとした気持ちになるかもしれない——。人のところに接したときに、自らの弱さ、無力感と正面から向き合わなければならない時もしばしば訪れます。

相手のところの内のすべてがわかるわけではないからこそ、日々、お見守りをくださる仏さまよりお教えをいただきながら、謙虚なところで生きる大切さにあらためて気づかせていただきました。

最後に、臨床実習生を受け入れて指導にあたってくださった国立病院機構四国がんセンターの谷水正人院長は、臨床仏教の未来へ向けてこのような言葉を述べられました。

「今また新たに医療者と仏教者が区別されることなく、この世をよく生きるという同じ目的のために尽くせる時代がすぐそこまで来ていると思います」

現在、すでに認定された第一期臨床仏教師の方々は、国内外を問わずさまざまな臨床の現場で活動されています。第二期の方々が認定されたこの日を新たなスタートとして、こころの苦しみを

和らげられる方が全国に、そして世界に一人でも多く増えたらと願うばかりです。

### 編集者よりお願い

日本仏教心理学会会員の皆様、平素は大変お世話になっております。

日本仏教心理学会ニュースレターは通常4月と11月に発行しております。会員の皆様のイベント情報や、著書のご宣伝、ご報告などを掲載させていただきますので、是非、事務局までご連絡ください。また、ニュースレターの原稿依頼をお願いすることがございます。

お忙しいこととは存じますが、何卒、学会運営、発展のため、ご協力賜われますよう、お願い申し上げます。



### 編集後記

今年も、講師を務める大学の授業の一環で、世界各国の留学生たちと京都を訪れました。アメリカ、メキシコ、中国、韓国、フィンランド、台湾、ドイツ・・・人種、文化、宗教を越えて、日本で学びたいという思いで半年～1年、日本に滞在してくれる若者たち。歴史を振り返ると、過去には敵、味方同士の関係だったのです。今の平和が本当に有難いのですが、世界情勢に再び不穏な空気が漂っています。なぜ過去から学べないのか不思議でなりませんが、民間レベルの交流を通して、この人たちと傷つけ合うようなことがあっては絶対にならない、と思えます。仏教徒の立場からしても、不殺生、アヒンサーを伝える責任があります。

「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

『法句経』

千石 真理 (心身めざま内観センター主宰)



私事ですが、この3月19日に父が他界しました。ゴールデンウィーク中に四十九日の法要を迎えますが、その間にこれまで本学会で学んできた事のいくつかが、改めて自分の中で実感されています。少し長めの編集後記となりますことを、お許し下さい。

カール・ベッカー先生は、2012年12月の大会基調講演にて、初七日・四十九日・一周忌と続いていく法要が、遺族の感情に寄り添うグリーフケアであることをご指摘下さいました。多くの方もご経験があるものと思いますが、私自身は葬儀社・菩提寺との打ち合わせから、通夜、告別式を営み、葬儀をお手伝い下さった方々や導師様への御礼など、慌ただしくしているうちに、父は焼かれて骨になっていたというのが実感でした。後悔、自責の念、離人感、喪失感、過去の恨み、謝罪の気持、身を割かれるような苦しみ、抑うつと解放、未完に終わった出来事、温かい思い出、心からなる感謝等々、自らの感情にじっくりと向き合う時間を持てたのは、ようやく一週間を過ぎたあたりでした。しかし、初七日は、仏教儀礼としては、告別式の日すでに済ませてしまっている（近年、そういう例が多いと聞きます）。ここに、仏教者や心理臨床家が、別の形で関われる余地はないでしょうか。本号「仏教心理まんだら」の、神仁先生らの手がける臨床仏教師のような存在が、ますます求められていると感じています。

ところで、上記のようなグリーフワークを行なおうとするなら、故人に関わる種々の手続きを順次片づけていく必要があると思います。年金・保険・準確定申告そして相続。我が家の場合は、父が遺言を残しており、相続の問題で揉めることはなく、家族が協力し合って手続きをこなしていくことができたのも助かりました。2011年12月の大会で、基調講演をして下さった上田紀行先生の著書に「スリランカの悪魔祓い（講談社文庫）」がありますが、つながりあう者達が同じ方向を向いて取り組んで行く時「癒し」の力は最大限に発揮される。あたかも、家族療法におけるシステムズアプローチのように。

松村 一生（シニア産業カウンセラー）